



昔語質屋
庫卷之三
初篇

神

馬場

馬場

特別
~13
982
3



門遠へ10
號982
卷3



昔語寶屋庫卷之三

東都

曲亭馬琴



依藤太が龍宮入の弓袋の下

弓袋ゆきふくろはたがえと。聞きこんとつみのまのまくまふふ精せいはて。ままららああふふ一い碗わん乃

茶ちやと喫くも襟えりかたのて組くるる舟ふねと。小こ膝ひざよよ扇あふぎと衝つくくるるまま童どうのの弄あそ物ぶつ婦むすめ人ひと

衣裳いさうのの後あととも小こ燈とう燭しやくのの下した小こ居いよよららんとて。席せきののすすむむ灰はいととささりりるる。

當下あうげのの聲こゑととあありりままるるをを彼か秀しゆ御ごねねがが湖うみ水みづのの龍りゆう王おうのの為ため小こ村むらてて殺ころせ

といふ巨こゝろ蜈蚣むごのの尻しり取とて。世よ俗ぞく附ふ會かいのの況きやうととひひ。件くだんのの蜈蚣むごハハ近ちか江えのの三さん上じやう山さんをを。

七しち圍ゐ半はんままたたららしし。三さん上じやう山さんハハ石いし部ぶとと草くさ津つのの間ま六ろく地ちとと喝かくるる村むら里らととるる。二に十じゆ町ちやう

むむららりり小こあり。二にのの山やまのの巔たかねのの凹くぼみみのの如ごとくく池いけあり。又また藤ふじ小こ巖いわ穴あなあり。山やま窟くわ門もんハハ僅わずか小こ

二に尺じやくたたりりるるままと。内うちをを究きうめめてて廣ひろくく。一いち名なとと蜈蚣むご山さんとといいふふまま由よし蜈蚣むごままりり

在寶屋庫卷之三

一

門 13
號 982
卷 3

不怪ゆづりのうらをらるるたのまらるる一とりの。五雜ござ又一説あり。奇地きち
 記きといふりのよ。平昌城へいせうじやうといふは、井いのり。その水みづ荊水しやうすいと通とほる。神龍しんりゆう
 有あてこまらう出いづ。故ゆゑ龍城りゆうじやうと名なつくとり。階確かいかくりその書まよは我われうら如ごとく。
 堀ほり抜ぬの井戸いんどとやら。龍城りゆうじやうと名なつけんあ。湖水こすいの中なといふと。龍宮りゆうきゆうの
 へ評ひやうがけきと。件けんの博士おかせが評ひやうせむく。龍りゆうへよろづ人と異ことなり。果はて
 人ひとともかからざら。その居ゐるも亦また必かならず人ひと間まの所ところの宮殿きゆうてん樓ろう臺たいのあり
 べうらべ。あつる小秀ひでこ郷朝臣きやうてんの到いたりといふ龍宮りゆうきゆう城じやうの瑠璃るりをりて沙すなと金玉きんぎよく
 とりて秘ひと。朱門しゆもん高樓かうろう帝王ていおうの宮殿きゆうてん小勝せうしやうとといふ人間にんげんと異ことなり。
 おりへは湖水こすいの神龍しんりゆうが。形状けいじやうと變へんじて小男せうなんとたり。秀ひで郷こぬ一いつ派はい導どうせしと
 いふるに彼か宮殿きゆうてんも。真まの宮殿きゆうてんのあり。又また浪なみとられて水みづとてり。五ご十じゆ餘よ
 町ちやうと多おほい。實じつは水中すいぢゆうのあり。水みづ中な小せう波はてえり。たのむらひ必かならず死しむ

といふのほ。や龍王りゆうおうの神通しんてうふらうて浪なみと波はとて湖水こすいと陸りくのまらる
 とありとも。数日かずじつ早乾さうかんとふあふべ。泥土どろちゆう深ふかくして渡わたりかこらる。あつれど
 樓閣ろうかくも水中すいぢゆうも。さる假物かりものあ。孤狸こりの人ひとと魅まと異ことなり。さるさるの
 秀ひで郷こ朝臣てんの武勇ぶゆうも。只ただ碎客さいかく癡漢ちかんのど。孤狸こりはさるこれとて
 世よは虚うそ氣きとる人ひとといふ。小秀せうしゆ郷朝臣きやうてんのさる。龍王りゆうおうの仇あひとる。
 蜈蚣むごと教しやうと威風いふうあ。龍王りゆうおう神通しんてう自在じざいなりとも。いづれとて魅まと異ことなり。
 彼か龍王りゆうおうのまらる。湖水こすいの浪なみとて。五ご十じゆ餘よ町ちやうのあり。樓ろうといふのあり
 へ。板いたく渡わたりかこら。夫それ海底かいぞうは龍宮りゆうきゆうのありといふ。とて智ちのあり。人ひとの信しんと
 せど。況いはて湖中こちゆうの宮殿きゆうてん樓閣ろうかくのあり。世せ俗じやくの只ただ耳みみと信しんとて目めといふ。いふ
 後ののちの物もの語ごあり。いづれとて取とる。あつて。まらる。いづれとて。意いは。意いは。意いは。
 そのまらる。原はら他た物もの語ごのあり。初はつより。あつれど。あつる。いづれとて。小説せうせつの是非しはいと

論せむと実言と云。古今の人情異なること「悉書と信せむ書るれば」
あつどといひ及ん。更よ古人の金言あるや。彼蜃氣樓なるもの。海
辺の人のとく。ことごとくそのつらみ。形蜃龍よりく
似るが。氣を吐とありとるん。その氣空中へ立のりて。宮殿樓門画くはく。
あつどとぞいふる。唐山ありの蜃樓とも。又海市とも名つけたり。亦一説小
蜃のその形蛇の如くやと大蛇。腰以下鱗のさみ。逆ぞうともい説あれば。
亦その状螭龍小似く。角あり耳あり。鬣ありて。紅きといひ説あり。又
維と蛇と文まば。蜃を生ともいひ。或は蜃は龍と。比及井よのうと
ハ氣を吐て雨とあり。海ありとれハ氣を吐く。宮殿をみるよといハ世俗乃
所謂龍宮城ハ蜃氣樓と訛傳へてあつる。又いふや。あらん。又一説は蜃
ハ是大蛤也。故又海中の車螯と蜃といふとありて。蜃をいふとまづ

車螯の
時珍云
楚書謂
之牟婆
各担拉
蟬ハ
若水本草
トトカ
蜃氣樓
馬者蜃
毒の下
大蛤を
あつど
海あり

と訓りのあまど。云古人の誤あり。り蜃とて。蚌蛤の属とせば。いづれ
より。變化して人と書する。小至る。蜃といふは二種あり。海市蜃氣樓と
なつり。のハ螭龍の属あり。亦維ハ大水小入りて。蜃とありといひ。維ハ蚌
蛇の化るといふ。然るれば。その類もたつたもの。よと蛤とて。いふは。信
蜃氣といふりのハ海氣也。大凡海水の精多く結て形とほ。散じて光を
あつて。このの。蜃の氣ありて。一説は。従ふといハ。夏雲のこまば
ある。奇峯小似ると小等。亦是あつて。怪む足らば。件の説と推して。蜃
氣樓なる物のなる。とあつて。水中の宮殿ハ何りのり。こまを伝らん。
古人の寓言疑ひる。よ。そ彼秀郷朝臣が龍小清と。巨蜃蛤と。射は
この物語も。本つて。あつて。あつて。唐山の小説ハ。唐の教家の宝蓋年間
蔣武といふりの射獲とて。業と。いハ。と。携矢と。挾と。熊羆虎

薄武
の象
巴の
を蛇
を射
るも
ころ



薄武

狸
在



九尾狐
三

と龍りゆうの小男こなん不化ふけうらや。巖穴いわあなと湖水こすいと。矢小毒やせどくと伴ばんせしよと。渡わたり小唾せつと吐つけけうと。煮牙にがと巻指まきさし俵わた撞つ大刀おほや。遣やみく龍宮城りゆうぐうじやう一條いちじやうの物結ものむすは解とけくえしるるふし。ちよども湖水こすいの底そこへ人の往ゆるふと。こねるふねふね前の小説せうせつよるふと。伴ばん見みよ。いと浅あはくろふの事ことも。能意のういるふにふあふべ。秀ひで郷朝臣あきむねへ左大臣さだみじん藤原朝臣ふじわらあきむね魚名公うななみこうの五男ごなん從四位下じゆゑいげ伊勢守いせのり藤成朝臣ふじなりあきむね曾孫そそあり。藤成ふじなりの子こ下野しもの權守ごんしゆ豊澤ゆづ。その子こ下野しもの大掾おほのり村雄むらゆ。その嫡男ちやくなん從四位下じゆゑいげ。下野しもの押領使おしりやうし藤太ふじ秀郷ひでごう母はは々々。下野しもの掾のり鹿嶋かじまが女むすめあり。秀郷ひでごうその女むすめ。下野しものの田原たはらといふと。こころ居ゐるひく。田原たはら藤太ふじと稱なづは。藤太ふじと。藤原ふじわら氏のし太郎たろうと畧りやくなり。或あるは大和おほの田原たはらと。生なまと。うといひ。近江おみの田原たはらと。領りやうし。ればとも。いふ。諸説しよせつ一定いちていなるふ。れども。秀郷ひでごうの子こ田原たはら千春ちゆん。藤原ふじわらの何なにの書あひも田原たはら。

とのと書かて俵わたと書かると。えね。地ち名なあるは。へ。か。り。ど。田原たはらと俵わた。書かへ字じと備くわへる。俵わたと稱なづは。小注釋せうしゆせきせん。と。件くだんの蔣武しやうぶか。と。と。い。う。と。龍宮城りゆうぐうじやうの怪談かいだんも。出でま。と。ちよども。俵わたの和訓わこんた。つ。ら。と。た。ら。と。の。義ぎあり。米こめと畧りやくむ。と。つ。ら。と。あ。ら。は。又。米こめと畧りやく巻ま。遣やと。つ。ら。と。和名わなせん。手束て葉はの畧りやくあり。ちよども。つ。ら。と。の。比ひう。り。書かへ。用もちて。俵わたの和訓わこんと。手束て葉はと。當あり。字書じゆは。俵わたへ。悲あはれ。朝あの。切き音ね。俵わた。散ちら。り。と。あ。つ。と。と。と。と。と。と。和訓わこんと。畧りやくと。つ。ら。と。と。唱なへ。る。ふ。と。か。ま。ば。手束て葉は。俵わたの字じと。當あり。と。つ。ら。と。む。し。の。人ひとの。根ね。と。つ。ら。と。又。田原たはらの。假字かり。小。の。米こめ。葉はの。義ぎと。あ。り。て。も。な。ら。と。つ。ら。と。の。假名かり。ら。か。ひ。あり。と。と。の。俵わた。と。い。ふ。苗字ななざと。物結ものむすの主人しゆじん公こうあり。と。巻指まきさし大刀おほや。遣や撞つ。撞つと。獲とく。財宝さいほう。倉くらは。充満ちゆうまん。衣裳いさうと。の。男おとこ。ふ。あ。ま。り。と。解とけ。し。秀郷ひでごう朝臣あきむね天慶てんけい。

小貞盛ぬと翼て將門と討滅し。弓矢をりてその家と奥し。大刀遣へその武を表し。巻絹米俵へ夜食を子孫小傳ると表し。撞鐘へ武名四海は鳴るよと表し。あつと巴原寓言とどのも。他意あるふあり。世俗の常終へ批する不足なねど。正史とどのも。小説と収るあり。げの人も只未とのを尋て。その本を究めど。神代巻不倣てや一書おも亦秀郎朝臣の龍宮小入るうと注し。ここの後人の追書するものらん。さればるたと書つひけ。可憐弓袋小ぬれ衣とが彼よるとて秀郎ぬも冥土と。こぞを憂くお不さめ。とどひあやむ。長物語も。そやをふゆる。維もあま代りものと。ひうけて引退けど。衆皆やと散動めたり。

第六

石堂丸高野詣の脚絆

弓袋が高輪小。まぐり感嘆と鳴ゆ。己む従書引。訛と辯じて。身のぬれ衣とひくとも。まが右へハ出。と衆皆面とあつ。講坐へ推處。ものる。見臺先生左右とえ。ひひひ徒を。夜らとや。深くふ。ごて。十三番目の古衣棚。蹴場の泥の乾干。の廿の人口小。膾炙する。加藤左門尉。重氏入道の嫡男。石堂丸の脚絆。そのむ。さても重氏入道の筑紫小名。さる武士。しが妻と側室。か。う。對ひ。假寝。を。兩個の婦。か。黒髪の小蛇。となりて。啖。あ。は。驚嘆。外面如菩薩。内如夜叉。と。忽地。悟。不二法門。これ。善花。のた。ひ。て。所領の地。を。棄。妻子。を。捐。恩愛。恋慕。の絆。と。とも。又。髻。弗。と。勢。を。ひ。て。高野山。へ。け。登。り。川。蓋。道。を。法。号。して。塵。を。避。迹。を。埋。め。只。顧。仏。は。事。る。戒。牙。の。勢。と。志。ぬ。ハ。妻子。の。愁。嘆。大。う。こ。ら。ら。ご。腹。

ことなれば家業の時をひかへ小奸計。蕙蘭繁らんと有りされども風
 の為は破れま。泊船静るらんとせよども。浪の為は洗きて。その子ら
 家と嗣よりあつ。その妻の室を守りびら。遂は他人は横領せる事。の
 為体と論じま。重氏一城の主ぞく。妬婦の妖怪と見て。驚き怖る
 妻子珍宝及王位。臨命終時不隨者と大集經の一句と申す。妻子
 と棄城地と捐俄頃小出家入道と。高野山へ隠まらる。仏魂よりれ
 と死へのと有りた道心るまども。先祖の為は甚だ不孝といへし。
 凡縁の妻女ふらふ。その子は嗣。その孫は徳。五積の八千代中。その所領
 の地と失され。官位俸禄ハ親も倍せと。ありあつての人情のる小土
 家する時。あつと怪しむ。怪しむな。狼狽て頭髪と剪妻を
 引く。子へ女さふ。その成長りども。俟ど一人の室の馬が狂ひ出せば。その尾

小舟。親族妻子。老黨まへ。意の馬が狂ひ出く。家難ハ大なるべ
 あれども。幸あつて内室ハ標正。石堂孝公深うけ。高野とむり
 づを葉小父の往方とあらん。一個の徒者。扶引と幸と。彼灵山
 へ掛く。内室ハのまじく。積るおひと。長途の疲勞。病卧て終む。はく
 づのり。あつと。石堂丸。ひとり八葉の峯。小け入り。今道公とて
 索まば。その人判。今道公。一昨判。今道公。小君のひて。ま。
 志まら。けま。孝子の誠。大師の憐れ。おひらん。端なく。又は環會と。
 年束の。不の。透悪人。よ。討片。終る家。奥ま。る。哀れの
 物。五説經の上。よ。三尺の臺。といども。口吟。といの。は。
 あれども。の。た。る。書。よ。と。受。つ。た。こと。萱
 親子地。既。古蹟。を。遺。つ。れ。ば。世。は。た。も。経。ご。し。その

塵實丁をまゝはしけし。出させぬと手とて。フリりく。席よあー
 居まば石堂丸の古脚絆へ迷惑さうまを改を撥さ。フと名をば石堂丸脚
 絆脚絆と喚るまど。全りつて。刈萱法師の二子あゆみ。原へ筑紫の
 の白水郎を思ふ。石之助といふりのる。九歳のと死親は捨れ。叔又
 の由縁よまどと。大和の五條へ出奉。公十年の年季を半勤し。十三といふ
 春の季。瀬岐の金毘羅おがまんとて。密よ主の家を脱出。されど。なや
 紀路ふと。路費を失ひ。象頭山へはゆ。まど。愚癡うら。高野へ来。諸
 まど。いづつよ。及び。傍輩ふあ。まど。笑の。或ハ高野山と俾名。う。
 又石之助と。喚るまど。石堂丸と。喚る。後よ。祝する。人への。苦く
 志死。おらして。某が穿する。脚絆へ石堂丸が。言。世。諸。一。馬。ま。は。し。る
 紙牌とつけ人。と。う。とも。憂。旅。の。憂。う。し。と。と。忘。る。と。叮。嚀。よ。教。訓

まく。まづ。くら。ま。と。教。萬。龍。の。底。へ。務。め。て。あ。り。し。年。と。行。く。隨。人
 中。れ。も。冥。途。の。様。よ。對。ま。て。う。ま。ば。變。る。世。の中。小。縁。故。と。ま。る。り。の。り。
 遺る脚絆と紙牌とを。好るの徒。跡。ま。し。これ。見。し。石堂丸が。
 高野諸の脚絆ありとて。紫帛紗。や。じ。く。二重。宮。よ。入。ま。し。る。
 價貴く。り。じ。く。歴。の。各。位。と。ひと。質。庫。よ。膝。と。ま。ど。由。教。僥。倖
 ら。し。不。幸。也。和。と。い。ね。バ。理。と。ま。る。う。る。世。の。常。言。も。今。ど。ま。ふ。ひ
 あ。い。む。讖。悔。話。説。面。目。も。い。ひ。も。終。じ。遠。巡。と。ま。ば。背。負。ひ。し。と
 吐。と。笑。ひ。り。当。下。見。臺。先生。の。眉。と。よ。せ。改。を。傾。け。寔。よ。彼。が。い。ふ。世
 小。秘。藏。む。る。古。器。の。よ。ま。か。る。階。悞。ハ。つ。た。も。あ。ま。これ。よ。由。て。彼。を。ま
 一。重。氏。法師。の。物。も。も。世。よ。傳。ま。ど。く。ま。あ。じ。ま。る。人。あ。ま。説。あ。じ。て。睡
 と。呼。ぶ。の。は。と。い。ひ。つ。坐。上。と。ま。ま。せ。臘。塗。の。管。よ。蔣。繪。と。淺。黄

二親不幸ふく。世と早く志の人も子といふものハ外ふし。又母後世の苦樂とあらば孝子の誠といふべきと。殊に志と勵まらう。かぐて長谷寺に系請て通夜して七日はるる。第三夜の夜。夏中より人ありて告ぐ。汝又母の生れとあらんと。高野の金剛峯へ到るべしと教ふる。祈親爰に於て。弘法大師の侯て紀州へといふ。母と云ふ。高野山へ来り。弘法大師の山と関さる。八十餘年。堂宇既に頽廢して。荆棘路を塞ぎ。是を厭ふ。幸とて塔所を到る。又祈す。是をばはらう。かじ行ふ。有一日觀史の内室あり。庭上は三莖の蓮あり。菩薩のつく。二の花の中は坐す。一の花のついで。祈親拜す。菩薩の。菩薩の名号を問ふ。對する。二大士の汝が又母なり。

是の是汝が年法華經流誦の感應と云ふ。その関する。乃花の汝が坐する。如ぞと教ふる。祈親の感涙を拭ひ。念願成就し。頼母して。直に山より。勅めて荆棘を伐ち。ひとて。修造を加へ。莊嚴を。小孫ま。是の。野山の再興。實は祈親が力と。祈親が七歳。又と喪ひ。十三歳の村母も。然らば。後生の苦樂とあらんと。法花經の持者と。祈親と名。小野。年経て高野山へ。け登りて。又母成仏の瑞相と。釋書の説と。密小写す。石堂九が又と索て。ひと。母のけ。母公の中途は病死せ。この哀は。名を石堂と名つけ。祈親法師が塔所を到り。孝天皇の後胤。姓ハ越智。又加藤ハ法守府將軍利仁。



高野山
石堂丸
父を索るところ

仁賢屋庫巻三



石堂母

仁賢屋庫巻三

の後胤あり。藤原氏あり。利仁の孫吉信如賀守不任せられし。藤原の者不加賀の如字と冠て子孫加藤と号まばその家亦異なり。又彼重氏入道と川萱通と名つけし筑紫の地名小菅ありて菅家のちん子のころと名ひし。新古今集小菅原贈大政大臣川萱の国守ふのこええつる人もゆるさぬ道べるなり。川萱の関ハ筑前不のり人ゆるさぬと稱せし。よ本つれて川萱道公がその子石堂丸と名ふるがら名告あはれし。死しつちや。かれは物語の又母するのハ祈祝法師と一編上人のり。政よあはれし何ぞや。既よその淵源と論辨するは石堂丸の脚絆とす。りの世よある。づもあはれ彼川萱の親子地務ハ別し所以あるなりや。好事乃のハ所為るなりや。それまは考果さる。昔草紙物なりと能きなり。

あまろ小哀とよまはせと。却人情とや失ふもあり。や出家人なりともその子ハとも孝むあつて。とと索あつし小情あり。名告のあはれし。物とありはと。真の出家といへば。彼西行法師より年を経て妻も名告遭ひ。その女児と共も住り。又読書見其臺子の論。ゆひ。所領の地と捨。妻子と捨。出家人となる。は仏の為小忠臣なり。とも先祖の為。不孝とよまはせ。儒の道。遮莫。仏法ハ三孫。絶て宗や。生涯を食するのめ。れば仏の道へ入る。の妻子と名ひ。爵禄は著さば。や形状ハ僧なり。とも。むまの。大俗。か。の。あ。得道。世の。を。西行上人。在俗の日。出家せんと。名ひ。さ。僅よ三歳。のりける。女児。父の膝。又携つ。抱えんと。は。な。れ。ば。凡。出家の志。と。遂。ん。よ。つ。守。へ。て。ま。ば。し。ら。ゆ。の。結。と。名。ひ。さ。る。凡。出家の志。と。遂。ん。

親王と稱せしむ。野人の臆溺。見載卑し。こま疑ふべし。つてのひひ
 将門又七人の陰武者あり。或はつゝ将門を身して。七人の形状と頭せり。つて
 何まう真の将門の衣をば。衣は秀郷竊し人として。平親王の美女を
 贈じ。こまと間者として。その真偽を探す。小婢谷の勤りの真の将門
 る。と告ぐ。秀郷終よ。こまを射ておとせ。かくてその首級を京師へ
 のせて。者首せられし。ある人こまとて。将門の米り。ぞ切られ
 り。俵者太か。とるよ。とよみ。つて。或は秀郷詠り。つて。
 将門の妻と密通し。その真偽とまる。もの。是疑ふべし。の二つ。或は
 つ。将門元來謀叛のころあり。貞盛こまを捕して。餐ん。とる。ふ。果さ。は。
 この比将門京ふあり。伊豫の死友と比叡山よ。来会して。平安京を直下し。
 密に逆意と相詰ひ。とつ。こま疑ふべし。の三つ。或は秀郷その始

将門が武勇とて。つて。その手小属を。と。ひて。下総よ。赴きて。対面する。小
 将門飲びて。衣冠と。も。整と。忙し。出迎。小言。諸應。答る。ふ。あ。似。と。つ。
 鹿忽る。り。け。且。秀郷。こま。と。今。その。器。ふ。あ。は。と。て。獵。て。下野。へ。ま。
 歸り。更。は。貞盛。朝臣。と。副。て。大功。と。ま。と。つ。こま。疑ふべし。の。四。つ。
 或。ま。の。ふ。と。め。六郎。公。連。将門。を。練。う。ね。て。死。せ。り。こま。疑ふべし。の。比。干。小。異。つ。
 と。い。ふ。と。こま。疑ふべし。の。五。つ。或。は。つ。将門。退治。の後。九條。殿。の。沙汰。を。つ。
 大將軍。副將軍。兵衛。少。勸賞。の。ふ。は。を。執。り。ま。つ。れ。る。を。小野
 宮。殿。強。く。副將軍。小功。の。と。稱。して。柱。ま。つ。れ。る。を。部。卿。の。こ。此。賞
 小漏。る。面。目。の。つて。内裏。と。退出。る。が。悪。心。を。發。し。天。由。箸。地。由。朋
 なる。ある。大音。を。放。て。同。勅。を。蒙。り。て。朝。款。を。碎。く。ふ。一人。の。賞。を。一人。を
 漏。る。是。便。小野。宮。殿。の。計。ひ。る。且。生。々。世。々。忘。る。が。彼。人。の家。門。衰

微して末茶永く九條殿の奴婢とるべしと罵りて手をとること打て巻
 と把りたるふ左右のハツの凡手の甲小徹と血流と出れば紅と齧がど
 宿所は臥て飲食を断て死を果と悪果とありてさるる怖れとあり
 けはバ冥と有まら次べとて神は齊て宇治の離宮の明神とまらば
 とつと或の忠支の悪果宇治の橋姫の神小合とてさるる崇せむ
 てられバ圓融院の天延年間京師とて支城とる人多く失うとつと
 是疑ふべしハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツて
 為俸ととりハツもまらるらんさるるの虚実を辨論とて夜とさる
 語らるるハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツてハツて
 褒貶と眼と瞳と相罵と疾楽とせんさるるさるるさるるさるるさるる
 の執束呵ととら笑ひつ忽地は搖ぎ出見墓子のこの席と博士と

稱せられらるがらかむらりの正とさるるさるるさるるさるるさるる
 将門既ハ八箇國とらち従へ平親王と偽号とさるるさるるさるる
 帝と稱さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 とと記されらる後世のさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 書記とさるるとさるる後の人の小説のさるるさるるさるるさるる
 さるる近属将門記といふ古書とさるる中ハ人その際略とさるる
 べ。件の将門記ハ朱雀院と本皇ともさるる本皇帝ともさるる
 将門とバ新皇と記さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 皇と称せんと悼あれば平親王とさるるさるる将門とて親王とせん
 ととさるるさるる凡五世の王ハ人臣小列りて姓と賜る古例と又
 一世の王二世三世の王といふとも姓と賜りし由ありさるる嵯峨以降

の源氏小妻あり。又當今の心子ありとも。宣下るけし。親王と稱
 稱し。もも。既に親王とて。や。心子。も。小姓あり。と。けし。彼
 將門。平朝臣の姓とて。けて。平親王と稱する。鄙俗の臆。笑ふ
 小堀。將門。東藩邊邑の人とて。替く。京小あり。執政の家系
 庭。た。が。なる。の。ま。ら。ざる。小。あ。び。の。み。づ。つ。親王と偽
 稱。せ。平の姓。除去する。新皇と親王と。青相近。世俗。流り
 て。今。平親王といふ。欲。こ。も。又。ま。ら。ざる。凡。逆。乱。の。臣。と。皇。と。偽
 上。志。し。道。徳。と。法。皇。と。稱。將。門。ら。新。皇。と。稱。せ。の。又
 第二條。小。間。々。の。世。よ。七。人。將。門。ハ。七。人。の。陰。武。者。あ。じ。あ。あ。び。
 又。將。門。が。身。し。七。人。の。形。狀。小。せ。ら。る。あ。あ。と。將。門。の。悪。を。佐。る
 の。の。權。守。與。世。王。從四佐下 村田王の弟 藤原玄茂。ま。治。怪。朋。坂。上。遂。高。藤

原玄明。ホ。あり。加。以。將。門。の。疾。兄。平。將。頼。舍。牙。平。將。武。と。て。七。人
 と。の。公。ご。ぬ。と。し。將。門。小。芳。ら。と。故。小。國。民。こ。ま。ら。る。が。根。戻。は。害。怖。て
 七。人。將。門。と。俾。号。せ。の。も。又。小。説。小。將。門。が。真。偽。を。ま。ら。んと。く。貞。盛
 秀。卿。相。謀。り。て。人。を。り。て。美。人。を。贈。じ。の。女。子。が。告。る。小。よ。ら。と。く。
 蜂。谷。の。動。の。の。將。門。ら。と。ま。り。て。れ。貞。盛。こ。を。射。て。又。の
 雙。言。と。報。ひ。秀。卿。の。首。級。と。ゆ。ら。と。の。小。説。と。実。事。の。と。ま。る
 の。下。慈。の。佐。倉。の。は。と。り。小。山。と。唱。る。小。山。あ。る。の。如。く。往。古。將。門。が
 討。し。る。蹟。あり。件。の。お。門。の。女。女。よ。惹。ひ。て。本。形。と。ま。れ。終。よ。貞。盛。秀
 卿。小。琴。と。ら。る。最。期。小。深。く。彼。女。を。恨。ら。る。その。女。が。名。を。桔。梗。前。と
 る。ん。ひ。ら。ん。と。い。ふ。今。至。て。お。門。の。は。と。り。小。山。の。枯。梗。生。せ。と。化。如。く。根。と
 う。し。道。て。も。立。地。小。枯。と。と。ら。凡。草。亦。ハ。土。地。の。肥。瘦。寒。湿。の。不。同。小

うつて。壞小のふとあつる物のつ。怪しむ不足るべ。これを門の死夫小
 附合し。桔梗前との入る女とて。仰り出せし。と。浅きうる。浮沈する
 ども。又秀御朝臣が。お門の妻小通とて。夫の真偽を探りぬると。い
 説へ。今昔物語と板せ。注者の説る。書を引れば。いよく信じ。は。
 同書小将門が。兵士平貞盛。原護扶。亦が妻とて。拘て。新皇
 こそ。まづ。は。ええ。う。こ。小護扶と一人の名の。ま。小書写せ。へ。傳写
 の。誤。あ。護。ハ。枝。が。又。ま。く。将門が。軍。兵。よ。拘。ら。ま。う。け。ハ。貞盛朝臣と
 扶朝臣の妻あり。又今昔物語う。う。あ。と。れ。お門が。詠。世。舟。を。我。て。
 貞盛の妻の返歌と漏ら。う。その。エ。も。亦。異。同。あり。小説。よ。お門。の。女。
 小惑弱して。遂小滅亡。世。とい。ひ。世俗。も。又。その。及。女。の。名。ハ。桔。梗。と。い。ひ
 る。い。ど。い。ハ。貞盛朝臣の妻。妻。あ。り。ハ。の。エ。と。説。り。傳。へ。る。あ。る。と。し。將門。記。小

吉田郡。蒜。間。の。江。の。邊。あ。て。掾。貞盛源扶の妻と拘ら。陣。所。又。治。経
 明。坂。上。逐。高。ホ。が。中。小。彼。女。と。追。領。せ。り。新。皇。と。い。と。と。聽。て。女。人。の。醜。と
 匿。さん。為。小。勅。命。と。下。と。い。と。い。と。勅。命。以。前。夫。兵。士。が。為。小。承。心。く。唐。領
 せ。ら。ま。ろ。就。中。貞盛の妻。今昔物語。よ。ま。た。い。妻。の。恨。に。刺。と。れ。體。と。露。と。て
 せん。こ。ひ。爰。小。件。の。陣。頭。ホ。新。皇。小。奏。せ。ら。く。貞盛の妻。と。容。顔
 卑。し。から。ば。願。く。ハ。息。詔。と。垂。と。こ。や。本。貫。小。遣。一。の。と。ち。う。世。に。く。ハ。
 彩。皇。勅。して。女。人。の。流。浪。ハ。本。屬。へ。返。と。る。の。法。式。の。例。に。又。鰥。寡。孤。独。よ
 懣。恤。を。加。る。ハ。古。帝。の。恒。範。あり。と。て。一。襲。と。賜。て。り。又。彼。女。の。卒。を。と。試
 為。よ。忽。地。は。勅。あり。て。歌。う。ま。は。し。く。
 冊。手。毛。風。之。便。丹。吾。問。枝。離。垂。花。之。宿。緒
 貞盛の妻。幸。小。恩。餘。の。頼。小。遇。ぬ。ま。と。バ。和。之。曰。



源氏妻

平貞盛妻



将門歌を
貞盛の妻と
いふ
妻の母は
何れか
之れ

多治経明

偽新皇の門

藤原遂高

冊の手毛花白散来者。我身和比志止於毛保江奴籠。

その次小源扶の妾一身の不幸と恥て人小寄て歌てりら。

花散之我身年不成吹風波心年遭杵物介佐利計田。

この言を説ぶの間人々和怡て逆心脚止ぬとええり。その為体と多ひ

たりと且バ魏曹操が冀州を撃とりと死。曹丕真先は城中小進と

入り。遠熙が妻ある甄氏と掠て逐し后とあつる小仇らり。こまらら

古書小由と死ハ貞盛秀御共小傳りて将門小美女と抱し軍略と

懈せしと小説の源綱を志る小足る人。つゞべさこの中尋るふ且

息と吹く。とつひつゞく懐紙りて額の汗を拭ひけり。

